

仙台市 長町駅東遺跡 第14次発掘調査

仙台市教育委員会 三浦 一樹

1. 調査要項

遺跡名 長町駅東遺跡（宮城県遺跡登録番号 010449）

調査地点 仙台市太白区あすと長町3丁目

調査期間 令和元年7月2日～令和3年3月26日

調査面積 約9,800m²

調査原因 店舗建設

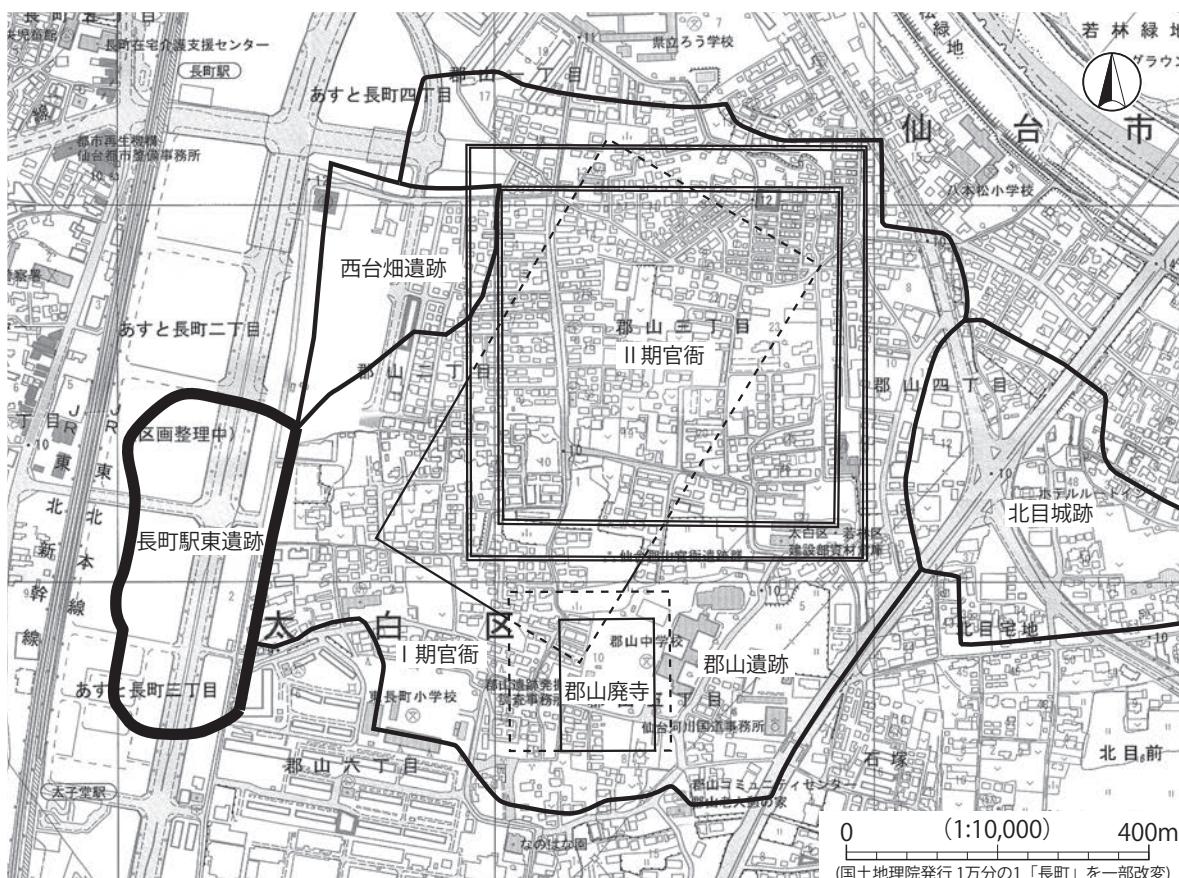
調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査指導係

株式会社シン技術コンサル

2. 遺跡の位置と概要

長町駅東遺跡は仙台市太白区あすと長町に所在する。遺跡の北約1.2kmには広瀬川、南約1.5kmには名取川が流れている。また、遺跡北東側には西台畠遺跡、東側には郡山遺跡が隣接し



第1図 長町駅東遺跡と周辺の遺跡

ている。これらの遺跡は標高 10 m 前後の郡山低地東側の自然堤防と後背湿地上に立地する。

長町駅東遺跡ではこれまで 13 次にわたる調査が行われ、7 世紀中頃から 8 世紀初め頃を中心とする竪穴住居跡が約 350 軒発見された。これらの竪穴住居跡は、西台畠遺跡で発見されている集落とともに、郡山遺跡の郡山 I ・ II 期官衙の造営や運営に関わりのある人々の集落と考えられている。

3. これまでの調査の概要

長町駅東遺跡ではこれまで 13 次にわたる発掘調査が行われ、特に古墳時代から飛鳥・奈良時代の竪穴住居跡が数多く発見されている。これらの竪穴住居跡は、第 5 ・ 6 ・ 7 ・ 9 次調査で発見された大規模な河川跡よりも北東から東側の、やや標高が高い位置に造られていたことが分かっている（第 2 図）。

長町駅東遺跡の古墳時代から飛鳥・奈良時代は、概ね 1 期から 6 期に区分されている（表 1）。

1 期の竪穴住居跡は第 6 ・ 9 次調査で発見され、遺跡南側にある河川跡の近くに数軒認められる。2 期は 1 期と同様の場所に竪穴住居が造られるが、遺跡北側にも居住域が拡大する様子が確認される。3 期は 2 期と同様、遺跡北・南側に竪穴住居が造られるが、北側において竪穴住居が増加する傾向がある。また、掘立柱建物跡や区画施設と考えられる柱列跡も見つかっている。

4 期は遺跡東側に隣接する郡山 I 期官衙の造営・運営時期にあたる。この時期になると竪穴住居が増加し、遺跡全体に分布するようになる。この集落の北東側は大規模な溝（SD66）と材木列（SA 1）により区画されており、南側も河川に沿って造られた材木列（SA 6）で区画される。5 期は郡山 II 期官衙期にあたる。4 期から継続して竪穴住居が多く分布する。4 期に造られた集落北東側を区画する溝（SD66）や材木列（SA 1 ・ 6）は、遺構の重複関係や堆積状況から、5 期の終わりにむかってその機能が徐々に失われていったと考えられる。

6 期は竪穴住居が大幅に減少する時期である。これは郡山 II 期官衙の機能が多賀城へ移されることに伴った現象と考えられている。この時期以降、竪穴住居は減少するが、小溝状遺構群が確認されることから、この地域は居住域から生産域（耕作地）に土地利用形態が変化したと考えられる。

このように長町駅東遺跡は大規模な集落遺跡であり、隣接する西台畠遺跡や郡山遺跡とも関係が深い遺跡であることが判明している。

1 期	5 世紀中頃～末頃
2 期	6 世紀初め～末頃
3 期	7 世紀初め～前半
4 期	7 世紀中頃～後半
5 期	7 世紀末頃～8 世紀初め
6 期	8 世紀前半～

表 1 長町駅東遺跡の時期区分

4. 第14次発掘調査の概要

長町駅東遺跡第14次発掘調査は調査対象地を南北に分割し、北側を令和元年度、南側（北・東側の一部も含む）を令和2年度に実施した（第2・3図）。



第2図 長町駅東遺跡調査区合成図

(1) 令和元年度調査

令和元年度調査区は長町駅東遺跡で発見されている集落の中心部にあたる（第2・3図）。過年度調査において古代の遺構検出面とされた基本層IV層上面で竪穴住居跡148軒、掘立柱建物跡5棟、溝跡80条、土坑142基、ピット1799基、性格不明遺構16基、小溝状遺構12条、



第3図 長町駅東遺跡第14次発掘調査平面図

遺物包含層を検出した。基本層IV層はシルト及び粘土質シルトを主体とする。なお、IV層以下は、縄文・弥生時代の遺構・遺物の検出を目的とした下層調査によって、河川堆積層が厚く堆積していることが判明した。

今回発見された主要な遺構である竪穴住居跡の平面形状は方形が主体である。その規模は一辺 4.2 ~ 5.2 m 前後が主体であるが、一辺 2.6 m 前後の小型のものや一辺 9.0 m 前後の大型の SI440 竪穴住居跡も認められる。SI440 竪穴住居跡はカマドに対面する南壁に出入口と考えられる張り出し部を備えており、本遺跡では初めて発見された形態であり注目される（写真3）。

また、竪穴住居跡のカマドと煙道を基準とした主軸方向は N-10 ~ 30°-W 前後となる傾向がある。この主軸方向は集落を区画する溝（SD66）や材木列（SA 1・6）の方向を意識したものと考えられる（第2図）。竪穴住居跡のカマドの大半は北壁か東壁に付設されるが、西壁や南壁に付設されものもある。カマドの燃焼部は壁より内側に位置することが多いが、壁外に張り出す形態も少数ながら認められる。

遺物は平箱で 251 箱出土した。その大半は 7 世紀前葉から 8 世紀前葉の土師器と須恵器で、その他に金属製品、石製品、土製品、弥生土器・石器などが出土した。

（2）令和2年度調査

令和2年度調査区は集落の中心よりやや南側部分と令和元年度調査区の北側部分、両調査区の東側の一部である（第3図）。基本層IV層上面で、第5・6・7・9次調査で確認された集落の西側を流れる河川跡を確認した他、竪穴住居跡 67 軒、掘立柱建物跡 3 棟、溝跡 21 条、井戸跡 1 基、土坑 88 基、ピット 720 基、性格不明遺構 9 基、遺物包含層を検出した。基本層IV層はシルトおよび砂質シルト、砂を主体としており、西側を流れる河川跡の影響を受けていると考えられる。なお、IV層以下の様相は令和元年度調査区と同様である。

これらの遺構は河川跡よりも 1 m 以上標高の高い調査区北東及び東側で発見された。主要な遺構である竪穴住居跡の平面形状や規模、カマドと煙道を基準とした主軸方向は令和元年度調査成果とほぼ同様である。

遺物は平箱で 73 箱出土した。その大半が令和元年度調査成果と同時期の土師器や須恵器であり、弥生土器や縄文土器も少量出土した。

また、古代の集落跡の調査の他に西側に流れていた河川跡の調査も実施した結果、この河川跡は弥生時代の遺物包含層を壊し、北西-南東方向にやや蛇行しながら流れていたことが明らかになった。なお、河岸の調査で明確な遺構は確認されなかったが、土師器や須恵器、切子玉などの石製品が出土した。

今後は報告書作成に向けて遺構・遺物の検討を行い、本遺跡で設定されている各時期（表1）の再検討や集落構造の規則性の有無などを解説していく必要がある。



写真1 SI413 完掘状況（南から）



写真2 SI413 カマド等完掘状況（南東から）

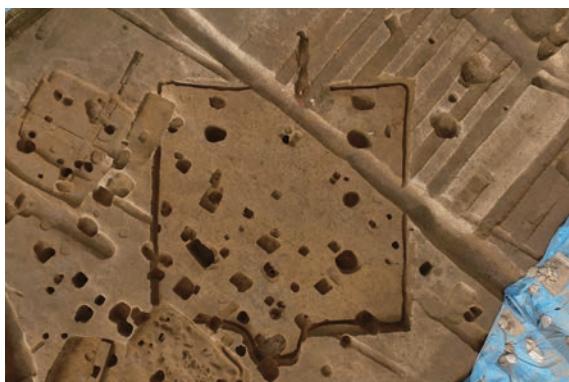


写真3 SI440 完掘状況（南から）



写真4 SI540 完掘状況（南東から）



写真5 SI540 カマド近景（南東から）



写真6 令和2年度調査の様子（南から）



写真7 出土遺物1



写真8 出土遺物2